

中 兼 和 津 次

『中国経済論』

—農工関係の政治経済学—

東京大学出版会 1992.11 xiv+363 ページ

現在の「改革・開放」体制下で市場経済化へとまっしぐらに突き進む中国は、最早かつての硬直的経済体制には後戻りできないかのごとく、その変貌は凄まじい。しかも、1949年以降の中国共産党指導下で約30年間存続してきた社会主義改造・建設の歴史があたかも存在しなかったかのような変貌振りである。しかし、建国以後の中国社会主義が過去の歴史を引きずり、スムーズに進展しなかったと同じように、現在の「改革・開放」も過去の歴史を引きずっており、様々な問題を抱えているのは周知の通りである。経済活性化の表舞台は華々しく見えても、一步日常生活レベルに降りてみると、そこでの社会経済システムは旧態依然であり、北京等での大都市で外国人が経験する世界と大きくかけ離れている。このような実情を考えると、いつの世においても歴史的総括を抜きに、流行に先走るの、物事の本質を把握できないであろう。

「改革・開放」のみに目を奪われる時代状況下で、中国社会主義を真正面から捉え直そうとする研究が現れた。それが本書である。本書は、解放後から近年までの中国社会主義経済建設に対する総括研究である。特に、「中国社会主義の特徴や限界は農工関係に濃縮されて表現されている」という視点からする中国経済研究書である。本書に一貫して流れる著者の中国社会主義に対する姿勢は明快であり、中国の体制に染み着いた偽善的体質批判は、読者にとって非常に心地好い。中国社会主義の科学的分析において、その社会構造を具体的に抉り出し分析すべきと考える賛同者は多いであろう。本書の構成を概観

しておく、以下のような章構成となっている。

- 序 章 国家と農民：現代中国理解のための枠組みと視点
- 第1章 中国の資本蓄積メカニズム
- 第2章 農工関係の経済分析—その1
- 第3章 農工関係の経済分析—その2
- 第4章 中国農業の生産性と制度効率
- 第5章 集団化と非集団化の政治経済学
- 第6章 中国における農業集団化の展開—その1
- 第7章 中国における農業集団化の展開—その2
- 第8章 1980年代の中国農業：いわゆる「農業徘徊」の意味を考える
- 終 章 中国農民・国家・社会主義

以上の章構成を大別すると、本書は2部構成となっている。第1章から第4章までは農工間のマクロ的計量分析であり、第5章から第8章までは農工間の制度論的分析である。各章の内容を簡単に紹介すると、序章では中国ならびに農工関係への接近方法に関する一般論を述べ、第1章では中国資本蓄積メカニズムとその特徴についての概観を行う。第2章では不等価交換説を中心とする農工間の資源移転に関する理論的実証的分析を行い、第3章では第2章をより具体的に考察するために食糧調達と労働移動、さらには農工両部門の成長率の相互関係に関する検証を行う。第4章では中国農業の発展とその制度的効果を計量的に捉えるために独自推計に基づく中国農業の産出・投入指数と合わせ、各種生産性指数を計測し、その変化を調べる。後半の第5章では農業集団化および集団農業のミクロ経済的理論を検討・整理し、集団化がなぜ困難なのか、その原因を追求する。第6章と第7章では中国における農業集団化政策の展開を2つの時期に分け、第6章では人民公社化以前の第1次集団化の時期について、第7章では人民公社化後の第2次集団化の時期について歴史的分析を行っている。第8章では1980年代半ばから問題になってきた中国農業の停滞原因とその構造について整理し、分析を加えている。終章では社会主義、特に中国社会主義に対する著者の総体的捉え方、歴史認識が提示されている。以上のごとく、本書は計量的分析と制度的分析の二方面から中国社会主義経済を考察する意欲的な研究書である。

本書の前半は、中国経済発展、言い換えれば中国工業化のための資金来源が一体どこに由来するのかという「社会主義的資本蓄積」に関する分析に費やされている。これまで、中国の研究者だけでなく日

本の中国研究者の間でも、中国では「欽状価格差」(シェーレ)を通じて農産物と工業製品の不等価交換が行われ、工業化の資本蓄積が行われてきたと考えられてきた。すなわち、農業から工業への価値移転、農工間資源移転が行われ、それが工業化の財源となってきた。さらに言えば、農業を犠牲にして工業化を行ってきたという見解である。これに対し著者はルイスやプレオブラジュンスキー等のそれぞれの命題に検討を加え、林智元や李炳坤、河地重蔵のシェーレ説を批判し、「中国における会計上の主たる貯蓄主体は農業部門ではなく、工業化のための余剰と資金を提供した主体は、直接的には低賃金に耐えてきた非農業部門の労働者達であった」(p. 84)と力説する。これほど明快に主張する著者の工業化資金蓄積における「非農業部門貢献説」に対して、評者はどこから検討を加えてよいのか判断に苦しむ。しかし、著者のこの見解は中国学界で大きな関心が寄せられており、長年、中国農村で実態調査に従事し、農民の心情の理解者と自認している評者としては私見を述べる必要があろう。それは、著者の見解と異なる。

中国社会主義改造・建設の歴史を見ると、著者も認めるごとく、土地改革後の農村では食糧や工業原料の確保のため農産物に対する統購統銷(統一購入統一販売)制度を導入して農村自由市場を禁止し、農民は農産物を自由に処分できず国家が強制的に買い上げるようになった。しかも、都市労働者に安定的効率的に食糧を供給するために、農業集団化を実施した。凶作時には自家食糧までも買い上げられ、農村を離れ都市へ流亡する農民も多かった。国家は、農民が生産現場の農村を離れることは農業生産力が不安定となり、工業化のネックとなり、さらには都市の社会問題を引き起こすため、1958年から戸籍制度を導入し、農民を農村に縛りつけた。一旦、農村戸籍に入れられた農民は都市戸籍の取得が困難であり、職業選択の自由だけでなく、移動の自由も失った。言い換えれば、8割の人口を農村に押し止め、都市という社会主義システムが保障されたともいえる。著者は、統計資料を駆使して農業から工業への価値移転がなく、工業化資金の来源は労働者の低賃金であるとする。しかし、農民が都市住民こそ食い外れない「黄金」(鉄ではない)の飯茶碗を保証されていると考えるのは無理のないことであった。すなわち、物的生産力の低い農村に人口の8割を押し止めて人口移動を遮断し、全人口の2割に満たない

都市住民を生産力の高い工業部門(都市)に従事させることによって、工業こそが工業化に貢献したと数値上で計量できたとしても、果たしてそれが中国の現実を照射しているのか疑問である。例えば、夫は外で働き、妻は家で洗濯・掃除・食事・子供の世話を追われているといった単純核家族において、その一家の家計は夫の収入に負っている。数値上、妻の社会的労働価格をゼロと設定するため、このような結論が導き出される。だからといって夫のみが生計に貢献していると誰が言えようか。中国の都市と農村との関係はまさしく夫と妻の関係である。計量的に農工関係を分析することは重要である。しかし、果たして中国から提供される統計数値でどこまで考察が可能かという点も考慮すべきである。

本書後半の歴史的制度論的分析は論理が明快であり、その見解に異論はない。著者は解放後の中国農村において農民が置かれた社会的経済的政治的状况を鋭く抉り出し、そこでの建前の社会主義と本音の現実がいかに乖離しているか、自身の調査研究をも加味して分析する。ただ、中国の農業集団化の社会的政治的要因がしばしばマルクス・レーニン主義や毛沢東一個人の理論や性格に帰せられるのは、少々不安を覚える。それはあたかも文革が毛沢東の思惑のみによって動いたとする認識と同じ論理に帰結するからである。確かに、中国社会主義改造や建設において毛沢東の意向が大きく左右したのは事実である。彼の威厳や「鶴の一声」が共産党内部に浸透し、さらにそれが末端農村にまで浸透していくといったのは何故か、中国社会の構造自身を取り上げる必要がある。例えば、中国の経済建設が失敗したのは社会主義システムを導入したからであるとするならば、資本主義システムを導入すればうまくいったという問題ではないからである。著者は中国における農村・農業問題の本質は非経済的側面にこそ隠されていると述べ、村松祐次の伝統中国の「貨殖主義」と「個別主義」をも持ち出す。まさしくこのような側面が社会主義下においてどのように存在し機能していたのか、また、それが「改革・開放」の進展の中で近代的な意味での「経済人」にどのように転化するのか、著者から最も教示願いたかった点である。さらに欲を言えば、著者の中国コミュニティー論を開陳して欲しかった。

久しく本書のような中国社会主義経済総体に係わる研究が公刊されてこなかっただけに、本書の中国学界に与えた学問的衝撃は大きい。本書は中国経済

に関する理論書だけでなく歴史書でもあり、専門家だけでなくこれから中国研究に取り組もうとする学生諸君にとっても本書から学ぶ点は大きい。是非とも一読を進めたい。

[石田 浩]